絵図Aなど）とを，同列に扱えるか否かについてである。後者の構造は個別のヴァリエーションが高いし，通絵図的特性と個別の特性との重層性の問題もある。

第2点には，絵図全体の形成原理や表現構造を分析する視角が多様に存在する，と氏は言う。しかし，地図としての特性ゆえに「地域像」という視角で絵図全体を分析することはたしかに可能であろうけれど，このような視角を数多く提示することは困難ではなかろうか。また，中世絵図の特色をふまえて，「地域像」以外の具体的視角をさらに提示してもらいたかった。

以上，細部にたちいたって要約とコメントを行ってきた。荘園絵図に関する従来の書物で，絵図そのものの解読にこれほどこだわった書物はほとんどなく，それゆえ，このようなコメントの仕方が必要と感じたからである。

歴史学と地理学では，学問の違いから，前者では史料学，後者では広く地図学とりわけ地理思想史の立場から絵図を扱う，とよく言う。しかし，この場合の史料学とは，絵図自体を史料として徹底的に扱い，籠められた情報を体系的に抽出するということであろう。したがって，地理学と大きく異なるものとは思えない。本書は史料としての扱い方，解読の手続きを明示しつつ，多様な情報を抽出することを模索しており，それゆえ，多くの人々に対して，絵図への興味を喚起するにちがいない。しかしながら，全体の成果が示すように，必ずしも十全といえない部分の多いこともたしかである。本書をふまえて私たちが最も気をつけねばならないのは，絵図を恣意的に操作してその研究素材としての価値をおとしめることなく，絵図の語りかけるところにすなおに耳を傾けることであろう。

〔付記〕

本書の執筆者3名（小山，高橋，吉田）も出席して昨年11月7日に葛川絵図研究会例会において合評会が行なわれたことを付記させて頂きます。

（松尾容孝）

長野　覺　著：

『英彦山修験道の歴史地理学的研究』

名著出版　1987年10月

A5判　512ページ　9,700円

30余年にもわたって英彦山に取り組んできた長野氏の研究が，一書にまとめられた。本書『英彦山修験道の歴史地理学的研究』がそれであり，著者が駒沢大学に提出した学位論文を骨子としたものである。本書の構成は，次のようになっている。

- 緒　論
- 第1章　英彦山史の概要
- 第2章　英彦山修験道成立の宗教的背景
- 第3章　修験道の入峰と峰入り道
- 第4章　英彦山修験道の組織と秩序
- 第5章　英彦山修験道の経済的基盤
- 第6章　英彦山修験道集落の実態

まず緒論では，本書の研究上の位置づけと，各章の主な内容が簡単に述べられている。著者によれば，修験道の三大拠点である大峰山・羽黒山・英彦山の中で，英彦山は他の2山に比べて修験道の実態は不明の部分が多く，古文書の検証と実地検証法によって，神仏分離前における英彦山修験道の復原的研究を行なったという（3～4頁）。

第1章では，古代から現代に至る英彦山の歴史が概観される。

第2章では，英彦山修験道成立の宗教的背景（神体山・天台霊山としての彦山）と，入峰・山伏三派（惣方，衆徒方，行者方）の成立に触れている。

第3章では，前半で大峰山など全国の霊山における修験道の入峰と峰入り道を展望し，後半で英彦山のそれについて，入峰集団構成（大先達，新客，同行，度衆）も含めて詳述している。

第4章では，英彦山修験道というよりも英彦山の自治組織（座主，座主代，役僧，検使，典医など）と，式目・法度に見られる社会秩序が述べられている。

第5章には，彦山の領域・石高，師檀関係，信仰圏，檀那の英彦山参詣，山伏の経済生活など，幅広い内容が盛り込まれている。

第6章では，英彦山の構成戸（坊家，院家，庵室，俗家）や構成者（隠居，当住，庵室山伏，弟子，同宿）について，また修験道集落の衰退とその要因について述べている。

以上簡単に紹介したように，本書は「歴史地理学

的研究」というタイトルではあるが，地理学の範囲にとどまらず，宗教学・歴史学などの分野にわたって，英彦山修験道の様々な側面を明らかにしている。英彦山は，その役割の大きさに比べて従来の研究が乏しかっただけに，本書の成果は貴重なものであり，本書の刊行をよろこぶとともに，著者長野氏の労を多としたい。

さて，本書に対する若干のコメントを述べさせていただくことにする。

まず第1には，全体的な研究の枠組みの問題である。上述のように本書は地理学に限定された論考ではないが，それは逆に言えば，地理学としてのまとまりの悪さになる。しかしこの際，地理学の枠にはこだわらず，これをひとつの研究として見た時，著者が英彦山修験道という研究対象の全体像をどのようにとらえているのかがはっきりしない。英彦山修験道の実態解明という目的（ただし著者は研究目的を明言していない）からすれば，英彦山修験道を構成する要素を概念的に提示し，その見取図に従って論を進めるか，あるいは英彦山修験道に関する個々の事象を，最終的にひとつにまとめる必要があろう。たとえば，章名にとられた英彦山修験道の「成立」「入峰」「峰入り道」「組織」「秩序」「経済的基盤」「集落」は，論理的にどのように関係づけられるのか，著者の考えを述べていただきたかった。それは同時に，他の霊山を研究する際の枠組みともなり，本書の価値を格段に高めるはずである。換言すれば，著者の英彦山研究から，他の霊山にも適用可能な研究枠組みを提示していただきたかった。本書は，英彦山修験道に関する個々の事実の記述にとどまっている観があり，惜しまれる点である。

以上の第1点を英彦山修験道の地誌的な枠組みに関する問題とすれば，第2点は，その構成要素の系統地理的な枠組みに関する問題である。本書の中で最も地理学研究者になじみのある修験道集落を例にとってみよう。この分野の研究は，出羽三山をはじめこれまでいくつかなされている。しかし著者の英彦山修験道集落研究が，従来の同種の研究といかなる接点を持つのかが述べられていないため，本書は英彦山の事例報告にとどまっている。これは何も集落に限ったことではなく，本書に多く見られる傾向である。もっとも著者にとっては，英彦山修験道の解明自体が目的とされているのであるから，これは的はずれの批判かもしれない。しかし英彦山を相対化して，それを包み込む研究の枠組みが提示されたならば，それは大きな意義を有するであろう。

実のところ，入峰と峰入り道について述べた第3章の前半は，そのような方向性を持っているのであって，大峰山や他の霊山の入峰と峰入り道にもいろいろと触れており，英彦山修験道を論じた本書の中では異質な部分である。著者は峰入り道を山岳交通路として位置づけ，胎蔵界・金剛界の結合，宿の内容，山伏と山人との共用などについて，一般化を図ろうとしている。しかし，時代差や地理学でよく言及される地域差が軽視され，修験道の入峰や峰入り道がいつどこでも同じであるという暗黙の前提が感じられるのは問題である。また，英彦山以外の事例の安易な引用には，史料的・論理的厳密性を欠く面があり，諸山の事例の寄せ集めに終わっている項もある。山岳交通路としての位置づけも，つきつめれば交通地理学を指向することになり，修験道の峰入り道という対象の持つ面白さをなくしてしまうのではなかろうか。評者としては，むしろ聖域の一要素としてこれを位置づける方が，生産的であると考える。

第3に信仰圏の問題では，それがもっぱら英彦山の経済的基盤としてとらえられている（第5章第2節）。信仰圏に経済的地域差があることなど興味深い点ではあるが，「信仰」圏という以上，信仰内容にまで立ち入ってほしい。英彦山内に居住し入峰修行する山伏の他に，英彦山の周辺から参詣に訪れる一般民衆についての研究を望みたい。

第4に集落の問題では，室町前期からあるという「十谷」（488頁）がもっと検討されてよいのではなかろうか。谷によって構成戸の性格が違うようであり（495頁），また人口の増減も異なっている（505頁）。著者は英彦山の構成戸や構成者について詳しく述べているが，それらの空間的配置には，あまり関心を示していない。このような空間的側面からの検討によって，集落構造のうえで何か得るところがあるのではないだろうか。

第5に図表の問題では，ひとつの図表に情報を盛り込みすぎて，かえってわかりにくくなっている場合がある。しかし著者は，図表を説明の手段とするというよりも，図表化自体を目的としているようであり（510頁），図表に資料的価値を期待するならば，それも認められよう。だが，たとえば，せっかく明治前期の復原図を作成している（口絵）のであるか

ら，それを使ってもっと論を進めることができるのではなかろうか。また些細なことであるが，図・表・写真の番号が最初から通し番号になっているのは，別の箇所で言及された時に捜すのに手間を要する。章ごとに番号を1から打ち直す方が，読者に親切であろう。

第6に，評者のフィールドとしている大峰山に関することで，疑問点をあげておく。表5で大峰七十五靡の番号を，柳宿から1，2，3とふっている（76頁）が，柳宿は結願所とされ，第75の靡とするのが普通であって，表5のように番付けした史料は存在しない。靡と番号がそれほどアイデンティファイされていないとはいえ，これは少し無謀である。なお同表中，柳宿の次の「文六山」は「丈六山」の誤植である。同様に図12の中の「行仏岳」は「行仙岳」の誤植である（114頁）。

また，峰入り道の「宿」が神霊的意味を持っていることを言うために，中国の漢字語源を引く（133頁）のは，付会の感をぬぐえない。「宿」の意味するところは，宿が機能していたのと同時代の日本語の用例の中から探るべきである。同じく現在「宿」と同義で使われている「靡」の意味として，道の意味で用いられた「路（なびき）」の漢字語源を持ってくる（134頁）のも強引である。これらの点に限らず，事実を解釈したり，そこから推論をする段階で，著者の立論に無理の感じられるところが，本書中にしばしば見受けられるのは気になる。なお「踞」の字は，「路」の誤写の可能性が強いのではないか。さらに笙ノ窟に永仁3年の碑伝が残されていた（138頁）というのは，著者以外にも見られる誤りであり，正しくは前鬼の金剛界窟にあったものである[1]。

第7に，著者のミスではないかと思われる点を指摘しておくと，284頁の「大里（一里＝六町）」は三十六町，293頁の「四境七里の霊仙寺領（神領）内における米作」は彦山領内，376頁の「一戸平均に約一升三合」は26石を2,630軒で割ると約1升であり，したがって「約一七〇〇戸では，約二二石余り」という計算は，約一七石になる。305頁の計算（二二石が「二六石」になっているのもミスか）もこれと同じである。またこれは誤りではないが，「庵室」の語が人を指して用いられている場合（435頁本文，450頁史料など）と，家を指している場合（451頁など）とがあり，使い分けを厳密にしておかないと，読者が混乱してしまう。

以上，評者自身の浅学をも省みず，失礼な字句を並べてしまったが，無礼の段は深謝申し上げたい。著者長野氏は，自らが英彦山の山伏の家の生まれであることを最大限にいかして，在地史料を渉猟し，聞き取りを行ない，山を歩いている。評者がここでいかなるコメントをしようとも，30年にわたるその作業の結果明らかにされた事実は，それ自体で重みを持ち，また興味深いものである。

評者は本書を通読して，英彦山修験道の解明に向ける著者の執念のようなものを感じている。それは特に本書の「序」や「あとがき」からうかがえるが，また著者から評者に贈られた謹呈の辞に，よく示されている。著者には失礼だが，最後にその一部を引用させていただき，つたない評を終えることにする。「約三十年の歳月を費やし（中略）神仏分離・廃仏毀釈の洗礼を受けて崩壊した英彦山修験道の実態に幾分なりとも迫り（中略）ライフワークのつもりで努力を続ける所存」云々。

〔注〕

1）杉田定一「大峯奥駈道の金石文及び之に類するものに就て」修験9，1924，34～41頁。

（小田匡保）